

Special Essay

通勤風景

内科学講座

(呼吸器・神経・膠原病内科)

谷脇 考恭

週明けの朝は、電車通勤をしている。福岡市の東北にあるK市の小さな駅から普通電車に乗る。福岡市までは10年間通ったルートであるが、鹿部の沼地にできた新興住宅街、新宮上府の広大な休耕田(この2箇所にはJRの新駅ができる予定)、千早・箱崎・吉塚の近代的な(個性のない)駅、ヘリポートのある和白病院、多々良川鉄橋西の急カーブ(R400。カーブ外側にマンションが建ち、福知山線の脱線現場に酷似。救いは九州人運転手のおおらかさ)、箱崎駅東の航空路(運が良ければ、着陸直前の飛行機の迫力を感じられる。米軍機、ガルーダ航空機、JAL ハワイ便以外は問題なし)を眺めながら博多駅に着く。

通勤客で混雑するホーム、通路でもみくちゃになりながら、久留米方面の特急のホームに急ぐ。席に着き、日本語・英語・韓国語・中国語のアナウンスを聞き10分もすると、マンションや住宅の立ち並ぶ中に、木立のベルトが見えてくる。古代の防衛施設の水城である。当時は高さ10m、幅80m、長さ1.2kmの土塁と、博多側に幅60m、深さ4mの堀を備えていた。日本書記によると664年に天智天皇が築いたとされるが、幻の九州王朝の防衛線との説もあり、謎の多い場所である。古代の謎に思いをはせていると、電車はいつのまにか、原田の五郎丸遺跡と高圧電線群、鳥栖スタジアム(毎年のように降格・昇格争いをしている、博多の森のような悲壮感は感じられない)を過ぎ、広大な草原(田園)の向こう側に多数の建物が見えてくる。特に目立つのは一番高い建物(久留米市役所)と、川沿いにある煉瓦色のビル群である。特に後者はNIH(National Institute of Health: 米国国立衛生研究所)を連想させる美しい建物である。川を渡り、電車は駅に着く。駅は新幹線駅への改装中であり、足場が悪い。歩道を疾走する自転車をよけながら、ブリジストン通りの落ち葉の上を歩くと、煉瓦色のビル群(今の職場)は目前である。

週末までは、基本的に医大通りを南北に歩く。最近には街にも慣れ、毎朝違うルートを歩くように心がけている。時に東西に移動し、新たな通りを発見する。週末は逆のルートの電車に乗るが、外は暗闇である。眼を閉じると、脳波は 波から 波、波となり、 波に戻る時は目的地である。

今春迄、週明けの朝を憂鬱であったが、今はそうでもない。その理由を今考えている。

